ミュージアムコレクション 55

藁利用の始まり ―木錘―

●コレクション・データ

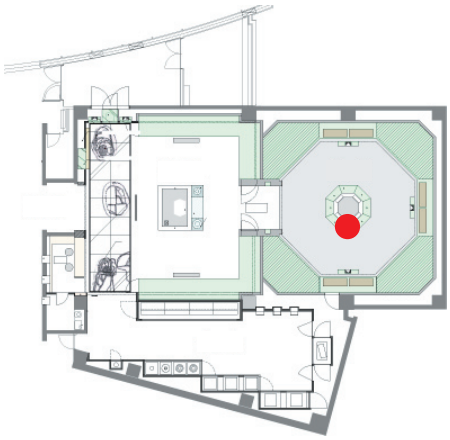
時　　代	弥生時代後期
調　　査	上：唐古・鍵遺跡第 74 次調査
	下：唐古・鍵遺跡第 90 次調査
発 見 年	上：1999 年
	下：2002 年
大 き さ	上：長さ 17.5 cm、直径 7.8 cm
	下：長さ 15.1 cm、直径 9.4 cm
展示位置	「藁を編む」

弥生時代に始まった米作りは、お米の収穫とともに、その後に残された稲藁を素材として、さまざまな生活用品を作りました。俵や蓆、菰、蓑、草鞋などの生活用品を始め、神社や正月に飾られる注連縄などの宗教的な品物に及び、近年まで重要な位置を占めました。

今回は、縄文時代から引き継がれた伝統的な「編む」技術を使い、新たな素材である稲藁を利用して俵・蓆などを「編む」道具を紹介します。編具は、編台の目盛板とそれを支える脚、経糸の両端を結んだ2個一組の木錘の複数セットで構成されています。藁などの緯糸の上に、経糸を付けた2個一組の木錘を前後に垂らし、これを交互に取り組んで緯糸を捩じり込むように編みます。これら道具の中で多く出土しているのが、今回紹介するような木錘です。直径10センチ前後の丸太を長さ15センチほどに切断し、その中央部に溝を作っているものです。唐古・鍵遺跡では、木錘が12個セットで出土する例があり、経糸が6本で作られた蓆などが想定されそうです。

唐古・鍵遺跡では、弥生時代中期の長さ6センチほどの小型木錘も出土していますが、これは稀なもので、編布を作っていた可能性があります。むしろ木錘の大半は、弥生時代後期以降に出現する15センチ前後のものです。これは、弥生時代後期ごろに穂刈りから根元から刈り取る「根刈り」へと移行したことに関係していると思われます。藁利用は、こうした「根刈り」が一般化することで可能になり、大型木錘が登場することになるのです。

唐古・鍵遺跡では、藁製品は出土していませんが、編具の変化から藁利用の始まりを推定することができるのです。これ以降、藁は私たちにとって生活用品の重要な素材の一つになったのです。



ミュージアム上面図と展示位置